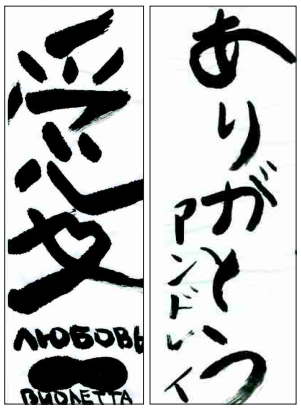
チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金　NEWS　No. 94　　2013 年 9 月 21 日発行
郵便振替口座　「チェルノブイリ子ども基金」　００１６０－４－９８３１６

放射線汚染地域に住む病気の子どものための特別保養
2013 年夏　ベラルーシ　ウクライナ

ウクライナ

ベラルーシ



ベラルーシのサナトリウム「希望 21」で保養をした子どもたちが書きました。

みなさまの募金のおかげで子どもたちを保養に招待することができました

2014 年チェルノブイリ救援カレンダー　10 月中旬完成予定
予約受付開始

放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養
2013年6月~7月　ベラルーシ　／　ウクライナ

ベラルーシ・ウクライナのサナトリウムでの保養が無事終了しました。ベラルーシでは森と湖、ウクライナでは海、それぞれ汚染されていない環境の中、安全で栄養バランスのとれた食事をとりながら過ごしました。また、新しいことに挑戦したり、友達と遊んだりすることも、心身の健康回復に大切です。

ベラルーシ

場所：児童健康回復センター　「希望21」ミンスク州ビレイカ地区／期間：2013年6月12日～7月5日／参加者：子ども34人（7～16歳）、引率者2人、教育担当者2人

腫瘍病（脳腫瘍、腎臓がん、骨のがん、甲状腺がん）、血液疾患の子どもたちが参加しました。彼らが暮らしているのは、ゴメリ市、レチツァ市、ナロヴリャ市、モーズィリ市、及び周辺の村（いずれも移住権利地区または放射線管理地区）です。34人のうち、3人の子どもの母親は、チェルノブイリ事故による障害者と認定されています。日本の里親から支援を受けている子どもも多く参加しました。滞在中、各自の体調に応じ、療養体操、薬効湯浴、シャワーマッサージ、アロマテラピー、薬草茶、歯科治療や、心理カウンセリングを受けます。引率者とサナトリウムの職員が連携し、子どもたちの健康面だけでなく、精神面も配慮されます。また、食事の他に、1日3回おやつ（果物、ジュース、ヨーグルト等）が出されます。午後はクラブ活動（陶芸、絵画、手芸、木工細工、コンピュータグラフィック等）です。それぞれ自分が好きな教室に参加し、作品作りを楽しんだりしました。陶芸教室は小さな子どもたちに人気があります。動物の形の置物や、蝋燭立てなどを作り、お土産として家に持って帰りました。他にも、毎日のように様々な催し物（自分たちが参加するコンサート、芝居、ゲーム大会、スポーツ大会など）に参加しました。天気がよければ、近くの湖で泳ぐこともありました。

最終日には再び医師による健診と、カウンセラーによる評価が行われ、全員の子どもに保養の効果があったと報告されました。

＜子どもの感想＞

◆この保養に参加するのは2回目です。今回もとても楽しかったです。いろいろな治療を受けたり、クラブ活動に参加したりしました。私は絵を描いたり詩を読んだりすることが好きです。みんなの前で、舞台の上で詩を暗唱しました。緊張したけれど自信がつきました。（マリーナ　11歳　ゴメリ市）◆僕たちを保養に招待してくれた日本のみなさんに深く感謝します。日本で原発事故が起きたことはとても残念です。僕のような病気になる人が増えてほしくないです。両親も悲しみます。（ニキータ　16歳　ゴメリ市）

＜引率者の感想＞

◆到着直後は、家を恋しがって泣く子や、夜怖くて眠れない子もい

ましたが、だんだん慣れていきました。何度かここへ来たことのある大きい子たちは、自分たちで何でもできて、小さい子の面倒もみてくれる子もいました。小さい子の中にも、すすんでいろいろな手伝いをしてくれる子もいました。子どもですから、時には悪いことをして、叱ることもありました。それは必要なことだとわかっているのですが、後でとても悔んでしまうのです。なぜかというと、この子たちはまだ小さいのに、こんな大変な病気を抱えているんだ、ということを思い出すからです。家庭的に恵まれない子もいます。私の孫も病気を乗り越えて、今大学生になりました。今回参加した子どもたちも、どうか病気を乗り越えて生きていってほしいと、心の底から願います。
（F・リュドミーラ　ゴメリ市）

ウクライナ

場所：国立子どもサナトリウム　（クリミヤ エフパトリヤ市）／期間：2013年6月2日～16日／参加者：子ども20人（9～14歳）、引率者4人

ロヴノ州ロキトノ地区、ジトーミル州ナロジチと周辺の村（いずれも移住権利地区または放射線管理地区）に住む子どもたちが参加しました。参加者全員に何らかの健康障害（慢性気管支炎、胃炎・十二指腸炎、側湾症、先天性大腸発達障害など）があります。それぞれの地区の学校の先生2名と、キエフの慈善団体から2名が引率者として参加しました。ベラルーシ同様、ウクライナも汚染地区に住む子どもたちには保養の権利がありますが、実際には、毎年全員の子どもが保養に行っているわけではないといいます。ベラルーシと違い、汚染地域の子ども専用サナトリウムというものもありません。子どもたちが保養をしたのは、主に呼吸器官の病気や整形外科的治療やリハビリが必要な子どもたちを受け入れているサナトリウムです。保養地としても名高い場所に位置しています。「新鮮な海の空気は汚染地域の子どもたちにとって一番の治療です」と慈善団体の代表者は言います。滞在中、子どもたちは鉱泉療法やマッサージ治療、運動療法を受けました。サナトリウムの建物の目の前に海が広がり、子どもたちは大喜びでした。治療やリハビリのための設備などが十分整っており、ウクライナだけでなく、ロシアや旧ソ連各国からも、多くの人々が訪れます。障がい者も多く滞在するため、手すりや車椅子用の設備なども完備されています。広い敷地内には、さまざまな種類の植物が植えられています。

＜子どもの感想＞

◆プール、治療、コンサート、ディスコが楽しかった。（イワンナ 11歳 ジトーミル州ナロジチ市）　◆砂浜、海、ディスコなどが楽しかった。サッカーができたらよかったと思った。（キリール 11歳 ジトーミル州ナロジチ地区バザール村）◆体に良い食事や治療があって素晴らしいところです。保養に招待してくれてありがとうございます。（ニーナ 14歳 ジトーミル州ナロジチ市）◆とてもよい保養ができました。元気になり、新しい友達ができました。（ヴィクトリヤ　9歳　ロヴノ州ロキトノ地区カルピロフカ村）◆海とプールに行くのが楽しかったです。泳げるようになりました。サナトリウムの環境と治療もとてもよかったです。素敵な夏休みをありがとうございます。（マリヤ 12歳 ロヴノ州オスニツク村）◆僕の趣味はサッカーです。お父さんは公益事業サービスの従業員で、お母さんは財務局の会計係です。日本とキエフのチェルノブイリ基金のおかげで、このサナトリウムで保養をすることができました。治療や健康増進のためのすべての環境が整っていてよかったです。でもスポーツ大会などがなくて残念でした。（サーシャ 12歳 ジトーミル州ナロジチ地区）

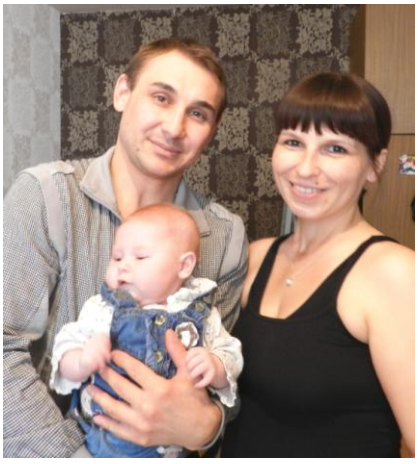
（報告　佐々木真理）

2013年6月 家族訪問 ベラルーシ(２)

報告 佐々木真理

チェルノブイリ事故当時、子どもだった世代の人たちの運命はさまざまです。子ども基金が支援してきた甲状腺ガンの手術を受けた人の中には、定期検査を受けながら薬を飲み続け、順調に回復していたかに見えていたのに、何年か後になって転移がみつかったり、別の臓器に影響が出てしまう人もいます。それが原因で命を落とした人もいます。病気を乗り越えて出産した人もいます。一方、本人はそれまで大きな病気にかかっていなくても、出産した子どもに深刻な問題が出ている場合もあります。今の子どもたちは甲状腺に限らず、さまざまな健康障害を抱えています。

F・マリーナ（1985年生まれ）ミンスク市



チェルノブイリ事故当時、マリーナの家族は、ゴメリ州ホイニキ地区の村で暮らしていた。村は高濃度汚染により強制避難地区となり、92年にグロドノ州ボルカブィスクに移住した。6人きょうだいのうち、4番目のマリーナだけが甲状腺ガンにかかり（6歳で発症）、4度の手術を受けた。「希望21」での特別保養に何度か参加した。手術後、体が弱くなり学校にも満足に通えなくなった。村では彼女の健康状態で働ける場所がなかったため、知り合いを頼ってミンスクに出てきて、店員などのアルバイトをしていた。2013年3月、女の子を出産。「甲状腺手術を受けた友達の中には、流産を繰り返している人もいますので、私もとても不安でした」とマリーナ。夫の収入だけでは暮らしは大変で、両親が村から野菜や小麦粉などの食べ物をよく持ってきてくれるという。訪問した時もマリーナの母親は、その日の朝採りたての森の木イチゴや白樺のジュース（白樺の樹液に砂糖を加えた飲み物）を持って、電車とバスを乗り継いでやって来ていた。マリーナの母親は孫をあやしながら、「この子は私の6人目の孫です」と目を細めた。

A・リーザ　ゴメリ地区ツェグリニャ村（2009年生まれ）

左副腎の神経芽細胞腫。母親（1987年生まれ）の話。「最後に化学療法を受けたのは今年の1月。その後、肝臓に問題が起きました。一度髪の毛が全部抜けましたが、また生え始めてホッとしています。娘を連れてミンスクの病院へ通うのは、時間も交通費もかかりとても大変です。順調に回復したら、来年からは幼稚園に通わせたいです。リーザはあまり外で遊べませんので、他の子どもが幼稚園に通うのをうらやましがっています。とても交流好きな子なのです。以前は何でも当たり前のように暮らしていましたが、娘が病気になってからすべてが変わりました。里親支援の事を聞いた時はとても驚き、信じられませんでした。自分の国が助けてくれないのに、遠い外国の人が助けてくれるなんて・・・」と声をつまらせた。

「チェルノブイリと福島」講演会

木村真三 獨協医科大学准教授（後編）

＜内部被ばくの原因は？＞

福島は、米は全袋検査、野菜は抜き打ちとはいえども、検査をしたものしか出荷していませんので、ウクライナの現状に比べて食品のコントロールは比較的うまくいっています。

では、被ばくの原因は何か。ひとつは家庭菜園です。自分たちの畑で採ったものは測定せずに食べています。二本松では、内部被ばくを呈した人には月に1回、定期検診を受けてもらっています。4回受けてもまだ（高い数値が）出るという方がいますが、そういう方はやはり、食事から原因を探ってみると自家菜園のものを主食として食べている方でした。もっと探る必要はありますが、安全かどうかを測ってみるだけで、内部被ばくをコントロールすることはできます。これはウクライナでも同じで、ナロジチにも測定室はあるのですが、年々、食品検体の持ち込みが減って、現在は開店休業のような状態です。

＜忘れたころに被ばくする＞

福島の方も、忘れたころに、ナロジチの青年のような状況になる可能性はあります。東北地方では、秋に山の幸、きのこが採れます。きのこはセシウムを濃縮しますので、食べてしまうとかなりの内部被ばくの原因となってしまいます。これは、忘れた頃にやってくると思います。

いわきでも、一昨年、事故のあった年は、本当に大量のきのこが採れました。「先生、今年は松茸が豊作なんだ〜」「うめかった」と地元の人は言いました。食ったのか？　と聞くと、1本だけな！って（笑）。この1本がよくないんです。1本が2本になって……そして……、そうガマの油売りのようになってしまう。だから、気をつけましょうというのが、私のお願いです。

いわきの川前町。川内村との堺にありますが、そこを流れる川は、川俣川といって、夏井川渓谷につながっています。夏井川渓谷はいわきの水源のひとつですが、実は、飯舘並みの汚染がある地域です。

いわき市はやっと、夏井川渓谷での渓流釣りを、「種の保存のためにやめましょう」という言い方で注意し始めましたが、去年（2012年）までは皆、川釣りをやっていました。入漁料を払って、キロ当たり1000ベクレルを超えるイワナやヤマメを釣っては、食べている人びとがいる。こういうことも、市は管理できていない状況です。

私はジトーミル国立農業生態学大学の名誉教授です。ジトーミルには医学部がないので、この大学が管理しています。来月、コロステンに二本松の方々を連れていく予定です。とても風光明媚で、歴史的にも、西暦800年くらいからあるという古い町です。

ジトーミルは、キエフ王国の王様が暗殺された、あるいは、第一次世界大戦の軍事基地、地下施設があったところとして知られており、6万5000人の市民が暮らしています。きちんとした生態系、あるいは病気を管理する医療センターがあって、何かあったらそこへ行くことになっています。

もっと深刻なのは、ナロジチ地区です。地区内には第1ゾーンから第4ゾーンまでがあります。日本の行政区分では郡に相当し、1町64か村、当時3万人が住んでいました。チェルノブイリの原発事故の2日後に、毎時30ミリシーベルトというとてつもない放射能の雲が通過していった地域です。

ジャーナリストで、元国会議員のアラ・ヤロシンスカヤさんという方が、この地域は本当に人の住めない地域かどうかということを国会で質問したとき、当時はゴルバチョフ政権でグラスノスチ（情報公開制度）によって、実は事故のとき、ここはたいへんな汚染地域でしたということが明らかになり、大騒ぎになりました。

今現在、ナロジチ地区には、経済的・政治的理由から1万人の方が住んでいます。

＜現状の問題点＞

2011年3月11日に爆発が起きましたが、浪江町の請戸漁港の漁師たちは、命からがら津波を回避して沖合いに出て行きました。この浪江の漁師から松川浦漁港でたまたまお会いして聞いた話です。「オレの船、午後4時を過ぎたぐらいかな、すっごい鉄の臭いがするんだ」って。何だよこの臭いって（船室から）顔を出した先輩がいて、陸にあがったときに、チェックされて、彼だけ違う所へ連れて行かれてしまった。そういう話があります。つまり、そのときにはすでに、メルトダウンをしているということを示すような状況があったということです。一証言として。

そのとき、首相官邸では、「直ちに影響はない」という会見が続いていました。双葉町の前町長井戸川克隆さんの話では、3月12日の午前5時過ぎに、官邸から全町民への避難勧告が出され、6時過ぎには避難を開始。実は、この爆発する前に、双葉町では、毎時1.5ミリシーベルトを超える放射能が確認されていました。

これは爆発前です。ということは、爆発前から初期の被ばくは続いていますし、避難できなかった方々もたくさんいるということがわかっているわけです。

3月12日の午後3時36分に、1号機が爆発しました。いわき市の志田名地区、川前町（原発より27キロ、事故から1か月後にまだ10μシーベルトを超えていた地域）の酒井忠平区長の話では、地震のあと3日間停電し、情報が欠落していた。「今日はなんだ、いっぱい川内から人がくるな、流れるな～」と、3日間みんなで（その光景を）眺め見つづけたそうです。

＜誰のための政治なのか＞

昨年（2012年）の6月29日に国会の参考人として呼ばれたとき、野田首相に向かって言いました。「誰のための政治なの？　誰のための行政なの？　誰のための研究なの？　目的を、主語を明確にしてください」と。

市民や県民、国民のためであるならば、そのこと（放射能汚染）をきちんと伝えなければいけない。しかし、いま政府がやっているのは、自分たちの地位のためであり、研究者であれば研究資金のため、地位や名誉といった、腐ったような話しかないんです。こういうことをやってしまっているから、国民から信用されなくなったのです。

緊急事態のときに情報を公開したら、国民はパニックに陥ると言われましたが、国民はバカではありません。きちんとした正しい情報を伝えれば、ちゃんとした対応がとれます。国民を自分より愚かだと考えることは、為政者の間違いです。

また、専門領域について、あたかも論文や資料の範囲で、まるで見てきたかのような話をする原子力工学者、放射線医学者がいますが、放射線の人体影響について、原子力の方が話をしたり、放射線医学の方が原発のことについて話をするという自体があたかも国民を惑わしかねないという問題提起をしました。

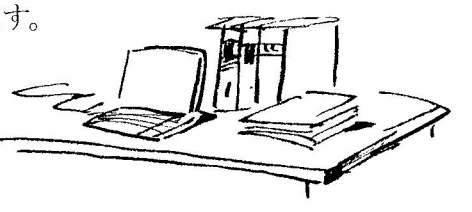
＜敵を知ることによって対処を知る＞

放射能被ばくについてですが、外部被ばくについては物理的に解釈できますが、いったん口の中に入ってしまった放射能は薬物と一緒で、どういうところに溜まりやすいか、どのような状況で、身体のなかを代謝していくか、そういったことを考えていかなければなりません。そのためには、さまざまな学問を集大成していかないと、わかりません。

先日出席した学会でも、京都大学の専門家が、ただデータをもらって解析しましたという論文を発表しました。誰のための研究なの？　と突っ込んだら、「研究ですから」と……。

これは研究ではありません。検査としかいいません。実際に福島で、福島の方々と生きるというのはこういうことですと、あえて伝えています。

また、みなさんの前でお話しできることを切に望んでいます。



広河隆一 講演（後編）　DAYS JAPAN 編集長・球美の里 理事長

彼らの仕組みの中で福島県は管理されているという状況です。ウクライナ・ベラルーシの地元の医者たちは反抗しました。日本の医者たちは反抗しない。僕は本当に日本の医者たちに良心を取り戻してほしいと思っています。個人的にいい医者はいっぱいいるでしょう。だけど黙っている、これは一体なんなのかと。まして福島の医師たちが、事故が起こった時すぐやらなければいけなかったのは、子どもたちや妊婦たちをすぐ逃がすということです。これは世界的な常識です。だけど、それを止めようとするIAEAのような力がある。なぜかといったら、逃がしてしまうと、この事故が大きなものであるような、そういう不安を煽る、彼らが不安を煽るというのは人々のことを考えて言っているのではないのです。それはあくまで自分たちの原子力産業の進展に支障が起こるから、言っているわけです。

女性と子どもを逃がすということはウクライナではありました。なぜ、ウクライナではあったのか。ウクライナのそのときの閣僚会議議長は女性だったのです。日本の事故が起こる1か月前(2011年2月）にその人と会いました。自分たちはどう動いたのか、どういうふうに自分たちは専門家たちと闘わなければいけなかったかということを話していました。彼女たちは安全宣言、心配ないってそう宣言された後、闘うわけですね。闘いのやり方は、医学で闘うほかない。しかし、WHOもIAEAも一つの協定を結んでいて、「危険だ」と言うことは禁止されるわけですね。だから彼女は立証するために、IAEAともWHOとも、その影響下にない、しかも最高の権威者たちを集めなければならなかった。それはすごく難しいことだったけれど、そういう人たちがスイスにいたので、その人たちを呼んできて、例えば、子どもたちを別々に検査して、別々な発表を1つの雑誌ネイチャーに発表するわけですね。その結果が同じだって。それで、IAEAもWHOも認めざるを得なくなっていくのです。認めたけれど、それが放射能のせいとは言えないじゃないかとずっと言い続けたのはIAEAです。彼らが事故のせいで甲状腺がんが多発したことを認めたのは、実に事故から10年目です。

甲状腺がんを発症したチェルノブイリの子どもたち

甲状腺のがんの手術をして、その後、厄介なのは、発見が遅れた場合は甲状腺のがんは転移するということです。転移したらどういうことになるのか。早期発見するような仕組みにしなければいけない。そのために、日本の、たとえば広島とか他のところの医者とかが、自分たちも手伝いましょう、やりましょうと駆けつけようとする、そういうような人たちもいるのですが、それに対して、元福島県立医大の山下俊一氏らは断っているわけです。もし受け入れてしまったら、自分たちが診療した子どもたちの甲状腺がんのデータが外に流れてしまうからですね。管理ができないから。医者たちにとって一番大事なのは、そのデータを管理して、疫病を管理する、自分たちの、この問題に対しての権威者でいつづけるためにはデータを自分たちが保有することです。検査なんてもう1週間もかからないで、できるんですよ。手術が必要という状況になったら、その都度早く手術をする。チェルノブイリで僕は手術に立ち会ったことが何回もありますけど、その時も、子どもたちがそこで手術されて腫瘍が取り出される。取り出されるとすぐにそれを別の部屋に持ち込まれて、そこで検査される。それによってがんかそうでないかわかる。

彼らはもうとっくに福島の状況を知っているけれども、そのことを今言うと不安を煽る。不安を煽るってことだけではなく、自分たちの失敗とそれから自分たちのやっているこの病気に対する対

策の無能さっていうのを表に出してしまうから、それの批判を浴びて自分たちは失墜してしまうから、だから彼らは数字をコントロールして隠すってことそういうことをやっています。

前頁の写真のインナやほかの甲状腺がんを手術した子どもたちと共に 1997 年 4 月に来日。数年前に結婚し無事出産をした。

この女の子はアレクサンドラといって、原発から 17 キロくらいの村に住んでいました。甲状腺の手術をして、その後毎年、半年ごとに検査を受けなければいけない、毎日薬を飲まなくてはいけない。こういう子どもたちがどういう状態で手術されるのか、その子どもたちに何が残るのか、心理的なそういう問題はどういうことが残るのか、子どもを見る力がない連中が、数字だけで判断していくわけです。

福島での甲状腺検査に市民が取り組む

甲状腺がんであることは、さき程言いましたように早期発見しなければならない。早期発見するためには、避難した人のためにきちっとしたスクリーニングをしなければならない。だけど日本では、山下氏らが、あなたたちの病院に甲状腺の検査を受けたいと来ても断れ、という通達を出します。文書が残っています。だけどその後で彼らは困った状態になります。

私たちは去年 7 月から福島の子どもたちに対する保養センターというのを沖縄の久米島で開設しました。「チェルノブイリ子ども基金」とか、チェルノブイリ救援運動をやっていた人たちと一緒になって、「未来の福島こども基金」や「DAYS 被災児童支援募金」などで協力し合って、保養センターを開設して、毎月 50 人ぐらいの子どもたちをそこで保養させ、そのときに希望者は検査を受けられる、そういうのを始めたのです。そのとき駆けつけてくれたボランティアの専門医が島根大学の教授で、その人とそれから久米島病院の機械を無料で使わせてもらって、それで検査をしてきました。今発見されなかったのはいいことだが、だからってこれからも安心していいことではない、たえず検査しなければいけないけれども、今、福島県はそういうことはしない。だけど僕らは外で勝手にやる。医療行為とか保険で支払うとかそういうようになると医療違反になりますが、検診というのは体重を測るとか脈を測るとかそういうのと同じようなものになりますから、それは構わない。そして医者がきちんと関わっている。そういう形でいくつかのところが動き出して、それに対して（隠している側は）困るわけですね。

私たちは被験者や保護者たちに対して検査したデータをすべて渡す。エコーの検査をした後写真が出ますから、写真も渡す。この写真がこれから大事な証拠になっていくわけです。病院では、医療関係のデータというのはカルテなどでも何年かたったら処分します。そういう写真の映像も、先日、専門家に聞いたら、2 年間たったら処分してもいい、ということです。本当に子どもたちが、がんになっていくようなときには、医療データというものが病院からなくなっていたら、もう何も言えないわけです。

今、嚢胞が 2 つぐらい小さなのがある、小さいから安全だから検査が必要ない、ではなく、この 2 つが 3 つになって 4 つになっていくのか、あるいはこの 2 つが大きなものになっていくのか、そしてそこの中で石灰化して、それが結節とか別なものが現れてくるのか、注意が必要です。変化が大事だから、どんどん測ってはそのデータを自分たち、保護者たちが持ち、そして相談がきちっとできるような医者たちが必要なわけです。それに立ち上がる医者たちが少ないのです。日本中で探した北海道の医師ほか 5 人の専門家と、いわきの測定所に私たちが機械を置いて、そこで 4 月からは本格的に甲状腺の検査を始めています。

移動用の検査機械は「DAYS 被災児童支援募金」からお金を出しました。いわきの診療所に据え置かれている機械に関しては、「未来の福島こども基金」「カタログハウス」とか、いろいろなところがお金を出しています。そういう状況で移動型

の機械を使って、首都圏での検査も行います。対象者は、関東に避難した被災者の子どもたち、あるいは関東のホットスポットと言われている所に住み続けている人たち、そういう形で我々は彼らがやらないことに対して、とにかく風穴を開けなければいけないと思っています。

現在の状況では、チェルノブイリよりはるかに多くの甲状腺の病気が発生する予兆が起こっています。

ウクライナで発見が遅れたために亡くなっていった女の子の葬式の場面。「とうとう私の順番が回ってきたわ」というのがその子の最後の言葉です。事故のころ、森の中で遊びまわっていた男の子ディーマは、倒れて1か月間で亡くなってしまいました。

だからってみんなが亡くなっていくかというと、そういうことではなく、助ける方法はある。つまり、さっき言った早期発見ということ。あるいは病気であったとしても、その後、転移を防ぐということ、いろいろあるわけです。

「希望21」で特別な保養プロジェクトを開始

この女の子（写真右ナターシャ）の場合は、手術の前の日です。これは手術の時です。それまでは元気だったのですが、この後「このまま自分は死んでしまうんじゃないか」とわんわん泣き出しました。その後、我々は彼女を支援の対象にしたわけです。僕はそのころ「チェルノブイリ子ども基金」の代表をしていました。それでそのときに、この女の子も保養の対象としました。当時は、対応できないということで、保養施設では病気の人間たちを受け入れないという約束がありました。そのとき、ドロズドさん（前号に掲載）という先に紹介した甲状腺の医師が、僕らが支援していた現地のベラルーシの保養所「希望21」に掛け合いに行って抗議しているところに、たまたま居合わせました。ドロズドさんは「一番保養が必要なのはあの子たちだ」と言ったのです。再発を防いで抵抗力を増すということで、子どもたちを丈夫にしていく。病気の転移を止めるためには、この施設での保養が必要、ということを彼女は訴えていた。僕は保養所の所長に対して言いました。日本の自分たちの団体が責任を持つ、そこに必要な機材は全部そこに揃えるし、医者たちの給料も出す、あの子たちには保養が必要なんだから、必要な薬も全部日本側が出すと言いました。

それから、夏休みの期間に甲状腺がん手術後の子どもたちが保養をするという「特別なプロジェクト」を始めることになったわけです。結局、それが成功します。何百人という子どもたち、あるいは全部合わせたら何千人なんですかね。そういう子どもたちがそこで保養して、そしてその他の病気の子どもたちもここで受け入れるようになっていきます。彼女は、そういうような形で健康を取り戻していった女の子です。彼女にはその後、赤ちゃんも生まれています。

2005年に結婚したナターシャ。現在は2児の母親。

放射能の災害というのは、あらゆる形で襲います。家族とか人間たちを、一つの病気とかだけではないですね、まして、IAEAとかWHOはたった一つの病気、甲状腺がんしか認めていないのです。その他は急性放射線障害だけ認めている。急性放射線障害もたった28人だけ認めるという状況です。事故が起きてから3週間ぐらいたって、それまでの間に死んだ人だけが放射能のせいで死んだ。それ以降に死んだ人たちは放射能のせいじゃないと言っているのです。同じ病気で同じ病院に担ぎ込まれても、1週間2週間後で死んだ人たちは放射能のせいじゃないと。彼らが数字をコントロールするのは簡単です。線を引っ

張ればいいんです。何日までにしようとか、何キロまでにしようとか。

ヒロシマの被爆者の定義

そのやり方が最初に始まったのは、日本の原爆のときです。被爆者という言葉は、定義は何かというと、原爆の爆心地から 2 キロ圏内に住んでいた人たちのことを被爆者と呼ぶと。そこから 10 メートルも離れていた人たちのことを被爆者と呼ばない。だからその人たちに対する援助はない、その人たちが病気になっても調査もしない、という状況になります。その 2 キロ圏内の放射線量というには、大体年間 100 ミリシーベルトです。年間 100 ミリシーベルト以下には病気は発生しないと言っているのは、“病気は発生しない”ではなく、“100 ミリシーベルトの外のところで自分たちは測ってないし調べもしていないから、事情が分からない”という、それだけに過ぎないわけです。今の専門家たちの検査、それが重松逸造が理事長になっていた放射線影響研究所です。そこは ABCC といって、原爆の影響を調べるところ、そのような人たちによってそういうことが決められていく。ここで線を引いてしまう。だから他は安全だとそういうことになるわけです。

上／3 人きょうだい。中央が長女ナージャ。右／ナージャと息子マキシム

母親をがんで亡くしたきょうだいに笑顔！

1989 年、最初にナロジチ地区に行ったときに会った女の子が、何かこう呆然としていたのが気になり、その次に行ったときにまた訪ねました。聞くと、あのとき、がんの母親が危篤だったのだと。あの村では、事故から 3 年 4 年たったころ、がんが多発していました。そして母親は亡くなり、子どもたちだけで家にいて、あまり寒いから家の中でコートを着て、ペチカの上で毛布を置いて寝たりしていたら、引火して自分たちの家が焼けてしまうということがありました。

しばらくしてから私たちはこの子どもたちを保養に送り出したのです。このままここにいてずっと鬱屈した状態にいるのはだめだからと。日本に連れてくるのでは なくフランスに保養に行くお金を出しました。すると彼女たちの笑顔が戻ってきました。その後、長女は結婚をして子どもを産みました。

保養の効果

向こうの子ども保養センターを建築するときベラルーシの大学教授が、日本の私たちに協力を求めてきて、私たちは中で使う教材などを支援することからスタートしました。

保養センターの様子です。この日本の盆踊りを踊っている子どもたち、これはみんな甲状腺がんにかかって手術した子どもたちです。子どもたちには、健康回復のために、ここでは楽しんで過ごせるように、日本からボランティアの人たちが行って、いろいろな教室を開いたりしました。この経験があったから、私たちは沖縄の久米島に保養センターを作りました。

ベラルーシでは学校のクラスごと移動して保養をするというやり方です。このやり方が一番いいので我々がやろうとしているのですが、福島県は本当に頑なにそれを拒んでいます。学校で保養に行かなければいけないということは、福島の学校が危ないことと認めてしまうことになる。それは出来ないとそういうことですね。

保養がどれだけ効果があったか、医者たちが調べて効果を出している。明らかに効果があったと

いうのが、現在だいたい97%の子どもたちに良い効果が表れているという。保養がどれくらい大事かということですね。「希望21」では現在まで6万人の子どもたちが保養しています。

これは子どもたちを連れてきて福島の子どもたちを海で遊ばせた時の写真です。あそこで遊ばせた子どもが最初は泣き出して、どうして泣き出したかと聞いたら、足に放射能がつくと、砂が足に着くことを怖がっていたんです。しばらくすると、ここは全然大丈夫だし安全だし、水飲んでも構わないし、平気だって言って、はしゃぎ回っていて、最後にこの子どもが記念に砂の上に自分の手の形をつけて、帰ったというのが、すごく印象に残っています。

以前、信頼できる甲状腺の医者はどこにいるのかという、いくつかの質問をDAYSで医師に対してアンケートをとりました。「あなたは被験者にデータをちゃんと渡しますかどうですか」ほとんどの人が「渡さない」と答えました。「その理由は何ですか」と聞いた場合には、福島の県立医大（当時）の山下氏の指導指針に基づいている、とそういうふうに答えています。

去年の7月から久米島で甲状腺検査を始めました。今はいわきで行っています。

チェルノブイリでは、86年以前のころは発症数が0人なんですね。2年に1人かそのくらいの人数だったのが、89年には7人になっています。90年から91年にかけてIAEAが調査して何でもありませんと、言っています。発症数がものすごい急上昇を描いたときに何でもないと言ったわけです。

DAYS JAPANでは、福島で歩きながら調べた放射能の測定地図を発表しています。こういうのを見るとよく分かるのですが、ここに保育所と書いてある。この保育所に通う子どもは、緑のところを歩いていけばいいですが、赤いところに合流してしまう、黄色いところが放射線管理区域、つまり18歳以上しか立ち入っちゃいけない。しかも飲み食いはいけない、住んでもいけない。そういう場所です。赤はもっと危険な所です。

それから、これは全く違う『帰還の坑道』という地質学をベースにして書いた小説です。どちらかというと中東の問題ですけれども、底辺に流れる問題は同じだと思っています。「人間は何を守るために闘うか」、それをテーマにしました。チェルノブイリとかいろんなことで、小説でダメだったら写真、写真でダメだったら文章、文章でダメだったら映像とか、あらゆることを動員しながら訴えていきたいと思います。

（木村氏・広河氏の講演録：文責　向井）

子どもたちのための保養施設
上/希望21(ベラルーシ)
下/球美の里(沖縄久米島)

※講演会「チェルノブイリと福島」（2013年4月26日開催）のDVDご希望の方にはお貸しします。事務局まで連絡ください。

※福島、及び周辺の被災した子どもたちの甲状腺検診実施のためにカンパを募っています。詳しくは15頁をご覧ください。

里親のページ

里子の家族からの手紙

ニキータは6月に検査に行きました。肝臓の病気の方は順調に回復に向かっていますが、甲状腺検査の結果、甲状腺に小さいしこりが見つかりました。ニキータはこの夏、サナトリウムに保養に行きました。そこにはたくさん子どもが来ていたので、とても楽しかったようです。間もなく新学期が始まり、ニキータは2年生になります。何か新しいことを知るのは面白くて、学校に行くのが好きです。ただ読み書きが苦手ですが、努力しています。

あなたの娘さんが学校に入学し、双子のお子さんたちが幼稚園に入ったことをとてもうれしく思います。こちらでは、幼稚園に入るのは大変です。3年くらい順番待ちしている人もいるくらいです。

ご援助を本当にありがとうございます。私たちにとってとても大事なものです。

ニキータの家族より　（ベラルーシ ゴメリ市）

里子からの手紙

僕も母もご支援にとても感謝しています。ほんとうにありがとうございます。

よいお知らせがあります。僕はベラルーシ国立大学に入学が決まりました。8/30にミンスクに行き、大学の寮に入ります。寮に入ることができて本当によかったです。アパートを借りることなど、経済的にとても無理でした。ミンスクは食費でも何でも高いです。母に負担をかけたくありませんので、入学までの間、アルバイトをしようと思っています。いつかあなたがベラルーシにいらしたら、僕の大学や寮をご案内したいです。

N・イワン（ベラルーシ　ゴメリ市）

2014チェルノブイリ28周年救援カレンダー

～チェルノブイリ・福島　命は宝～

2013年10月中旬完成

予約受付中！

2014年カレンダーは、広河隆一撮影のチェルノブイリと福島の子どもたちの保養の写真で構成されています。

ご自宅用に、職場用に、またプレゼント用にも最適です。

どうぞ周りの方々にも広めてください。

●定価：1000円（送料別）
●送料：2部まで100円、3～9部まで実費（10部以上：1割引き／送料無料）
●お申込み方法：Fax 、E-mailまたは郵送でお申し込みください。
●お支払方法：お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振込みください。
（注：カレンダーが届いてから、お振り込みをお願いいたします。）
●カラー
●サイズ：縦42cm×横30cm　見開きA3サイズ●デザイン：スタジオ・ギブ

カレンダーの収益は
チェルノブイリと福島の原発事故による
被災児童のための救援金にあてられます

黒部ドクターのお話

福島の子どもの甲状腺がんの多発について

2013年8月20日、福島県の「県民健康管理調査」検討委員会が、甲状腺がんと診断が「確定」した子どもは18人で、「がんの疑い」は25人と報告した。

県の甲状腺検査は、震災当時福島県にいた18歳以下の約36万人が対象で、これまで19万3千人の一次検査結果が確定した。2011、2012両年度の二次検査の結果が確定し、発表された結果で、2013年度は一次検査までで、まだ二次検査の結果は出ていない。原発に近い市町村から順に子どもの甲状腺超音波検査をしていて、まだやっと半分強でしかない。特に爆発直後にホットスポットとなって放射性ヨードの被曝が疑われているいわき市などはまだ検診は進んでいない。今後、検査が進めばもっと増えることが予想される。

この結果をどう見るか。今までは先進国では、子どもの甲状腺がんは非常に稀で、日本でも今まで僅かしか見つかっていなかった。チェルノブイリでも事故後の1～2年には少なく、3年後から増えて行った。それで調査主体の福島県立医大の鈴木真一教授は、「2、3年以内にできたものではないと考えられる」と原発事故の影響に否定的な見解を示した。果たしてそうであろうか。チェルノブイリでは、このような検診をしていなかったので、症状が出てから診断されたし、過去に一般の子どもの甲状腺検診をした例がない。確かに成人ではがんはゆっくり進行するが、細胞分裂の活発な子どもではどうであろうか。もちろん、原発事故によるものと断定できるだけの根拠もないが、余りにもかけ離れて甲状腺がんの子どもの発見が多過ぎる。やはり、原発事故の影響も考えておかなければいけないと思う。今後検診数が増えると共に甲状腺がんの子どもの増加が確実視されるが、世界的に見ても、子どもの甲状腺がんとしては多過ぎる。今の所、転移した例は報告されていず、手術されているが、チェルノブイリでは、見つかった時は、転移している例があり、検診をしていなかった為ではないかと考えられる。過去の甲状腺がんの例から、考えるのではなく、全く経験のない例として取り扱うべきではないか。そうすると、原発事故の影響と考えることもできる。医学医療は、社会的に左右される社会科学であり、自然科学ではない。なぜなら、がんが見つかってもその原因を特定することは医学ではできないからである。他の病気でも同様で、その例としては、水俣病、森永ヒ素ミルク中毒、カネミ油症、イタイイタイ病、アスベストによるがん、その他多くの公害病、予防接種による被害など、数多くある。疫学という手法で判定するのだが、これも確定的な手法ではなく、むしろ社会的に判断される社会科学と言っても良い位である。

予防接種による被害は、裁判で社会的に判定された。甲状腺がんも、福島県の原発周辺に多発しているので、社会的には福島原発事故が原因と疑われることが必然である。チェルノブイリでも子どもの甲状腺がんが急増してから国際的に原発事故のせいだと認められたのは10年以上たってからであり、甲状腺がん以外のがんは未だに国際的には原発事故が原因とは認められていない。原発推進派の力が大きく、原発事故の被害をできるだけ小さく見せようとしている。チェルノブイリ事故後の健康に対する影響も小さく見せかけられていたが、福島原発事故の後に再び大きく取り上げられるようになった。今後、白血病や他のがんが子どもから始まり、潜伏期間を経て成人にも増加することが予測されている。私たちが支援している「いわき放射能市民測定室たらちね」では、子どもの検診が中心であるが、そのほか地域や年齢を限定せずに甲状腺検診を行っており、大人や福島県以外からもがんの疑いの人が見つかっている。国はなぜ年齢と地域を限定して検診をしているのであろうか。もっと対象を広げて検診をすべきではないだろうか。

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師
黒部信一のブログ http://kurobe-shin.no-blog.jp/

甲状腺がんの息子を亡くした父親が証言　～原発を問う民衆法廷（2013.7.21-22/東京）～

ウクライナのシテフォルク・ミーシャ（子ども基金ニュース90号・2012年9月発行で紹介）の父親のワレンチン氏が来日。「原発を問う民衆法廷」（※）で、核被害者の一人として証言に立ちました。また、7/19「未来の福島こども基金」総会と、7/24「原発災害情報センター」（福島県白河市）でも講演を行いました。

～*～

「この度は息子のミハイル（ミーシャ）の身に起きた不幸についてお話する機会を設けていただいたことに感謝申し上げます。また、広河隆一さんをはじめ、チェルノブイリ子ども基金の皆様にも、これまでのご支援に対し感謝申し上げます。

1986年4月26日、チェルノブイリ原子力発電所で恐ろしい大事故が起きました。当時、外国では人々の命に危険があることが伝えられ、テレビには中央ヨーロッパや東ヨーロッパでの風向きが地図で示されていました。その時キエフをはじめウクライナやベラルーシの様々な町では、メーデーを祝うデモやパレードが行われていました。情報を隠した責任者たちは後になって、住民たちがパニックを起こすのを防ぐためだったと説明しています。しかし、もしすぐさま人々の避難が行われ、事故が起きたことや必要な予防措置が講じられさえすれば、被害はもっと小さくて済んだかもしれません。私には日本の皆さんの辛さが分かります。福島第一原発事故の被災者の皆さんが、避難先で専門の測定器を使って甲状腺を調べられている様子をテレビで目にした時、その辛さを自分のこととして理解できるのです。チェルノブイリの事故によって、平和目的の原子力というものが全く安全なものではないことが世界に知れ渡り、福島第一原発の事故によって、それが間違いないことが裏づけられたと思っています。かつてベラルーシでの保養を終えた息子たちをキエフで出迎えた時、その様子を目にするのは大変辛いことでした。なぜなら彼ら（12歳～16歳）は皆、甲状腺ガンという病気を抱えた集団だったからです。

4回目の手術をフランスで受けた後は全てが良好でした。地元の大学を卒業後、銀行に就職、責任あるポストに昇進を果たしました。しかし2008年の世界的な経済危機にウクライナも見舞われ、解雇されました。同年、チェルノブイリ原発事故による2級障害者の認定を受けていた息子は、認定の再審査に伴う検査を受け、腫瘍が見つかりました。私たち家族や友人を心配させまいと、彼はあまり多くは話しませんでした。私の妻、つまりミーシャの母親は、2年前の11月に亡くなりました。息子の身を案じる妻はストレスを抱え続け、そうして彼女の心臓は、持ちこたえることが出来ませんでした。息子は最後まで病気と闘い続けましたが、私の見守る前で亡くなりました。こうして私は一人残されました。どんな慰めも私の苦しみをやわらげてはくれません。本当に、放射能というものは目に見えず、どのような対策をとろうとも、段々と人を死に追いやるものなのです。チェルノブイリ原発から離れた場所にいたミーシャがなぜ病気になったのかと疑問に思われるかもしれません。しかし94～98年の間だけで、事故当時14歳以下の子どもだった人々の間では4千例以上の甲状腺ガンが見つかっているのです。専門家たちはその大半がチェルノブイリ原発事故の影響によるものだとみています。

私にはこの話を書いたり話したりすることが今でも辛いのです。私の心の傷はいまだ癒えず、いつも亡くなった息子のこと、妻のことを思い出してばかりいます。私の心に安らぎはないのです。

福島の地に続いて、再びこのような原発事故が繰り返されることのないように、そして皆さんのもとには、このような苦しみと悲しみとがもたらされることのないように心から願うものです」

～*～

民衆法廷では、他に次の方々も証言を行いました。ウラン採鉱反対住民（オーストラリア）、原発事故被災者（福島県、武藤類子さん）、核廃棄物処分場被害住民（台湾）、原発労働者（斎藤征二さん）、広島原爆による被爆二世（韓国）。※＜民衆法廷とは＞原発事故と原発政策を発進した政府と電力会社の「原発犯罪」、その責任を法により明確にし、被災者の避難の権利、損害賠償、内部被ばく、原発の危険性など、原発の課題を検証し、実際に提訴されている裁判に対し、民衆法廷の判決（勧告）、検証の内容などを生かし、支援するために行われました。

募金・救援状況

●募金状況　2013 年 6 月～ 8 月　（単位:円）

	6 月	7 月	8 月
募金件数	117 件	199 件	64 件
救援寄付金	607,014	932,129	224,445
保養費	93,400	127,000	55,500
特別保養費	35,000	3,000	−
里子支援	119,540	1,568,430	346,280
ニュース購読費	38,000	50,000	22,000
27 周年救援イベント賛同金	2,000	1,000	−
合計	894,954	2,681,559	648,225

☆ほかに現物寄付として切手 800 円分

●救援状況　2013 年 6 月～ 8 月　（単位:円）

＜ウクライナ＞

◎子どもたちの生存

里子支援 10 人(7～12 月分)	305,520
緊急支援 2 人	61,104

＜ベラルーシ＞

◎希望 21

医薬品	445,730
特別保養費(子どもの保養後半分)	810,012
クラブ活動備品支援	1,046,840

◎困難の中の子どもたちへ希望を

特別保養費(保養バス代、保険代)	232,581
里子支援 54 人(1～6 月、4～9 月、7～12 月分)	1,614,777
緊急支援 10 人	270,336
奨学生支援 1 人	29,475
運営費(車修理代、スタッフ給料 1～12 月分)	490,464

◎チェルノブイリのサイン

里子支援 5 人(7～12 月分、10～2014 年 3 月分)	154,497

チェルノブイリの歌声　～みなさまからのメッセージ～

◆チェルノブイリは続いている事、ニュースを読んで再確認です。ありがとうございます。(愛知県Mさん)　◆今年も懸賞で当てたお金を寄付します。活動を応援しています。(東京都Tさん)◆子どもたちの幸福を祈っています。(愛知県Sさん)◆ニュースをしっかり読んでいます。コピーして友人に渡すこともあります。ご苦労さんです。(山梨県Kさん)◆人は助け合わなくてはなりません。ニキータのママに愛を！頑張ってほしいです。(東京都Oさん)◆原発を問う民衆法廷(東京大会)で貴基金の果たしておられる役割やボランティアの方々の人柄にふれ、わずかですが送金させていただきます。(神奈川県Fさん)

❤ 募金団体名一覧 ❤

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

【6 月】トランスフェリックマネジメント／日本キリスト教団 広島船越教会／リサイクルグループ カリーナ／(株)ジョイメイト／(医)小栗小児科医院

【7月】トランスフェリックマネジメント／こどものくに保育園／(株)ジョイメイト／はままつ「政経・文化」フォーラム／弓町本郷教会 女性の会／三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金／イエス・キリスト教会 祈りの家

【8 月】 実教出版 放射能倶楽部／自治労日野市職員組合／(株)ジョイメイト／トランスフェリックマネジメント／(株)音楽センター／ケイ歯科クリニック／千葉中央法律事務所／チェルノブイリ子ども基金奥羽

福島の子どもたちに保養＆甲状腺検診を！

福島県の検査では甲状腺がん、甲状腺がんの疑いと診断された子どもが報告されています。子どもたちの健康維持のために保養が必要です（広河講演、黒部ドクターの項参照）。そして早期発見・早期治療できるよう積極的な甲状腺検診が必要です。「いわき市民放射能測定室たらちね」では今年 3 月から甲状腺検診を開始。昨年 8 月から実施した久米島での検診を含めるとすでに 1442 名の子どもたちの検診を行いました(7 月末現在)。検診前のアンケート、検診の際のチェック項目、データの入力など、協力の医師たちと話合いを重ね検診を行っています。今後は福島県内に限らず、周辺の被災した子どもたちなどにも移動検診という形で行います。詳しくは「たらちね」の HP をご覧下さい。
http://www.iwakisokuteishitu.com/index.html
チェルノブイリ子ども基金の姉妹団体「未来の福島こども基金」では、「沖縄・球美の里」での保養支援、「たらちね」の甲状腺検診支援のカンパを募っています。どうぞよろしくお願いいたします。

【募金先】郵便振替口座：00190-0-496774
口座名：未来の福島こども基金

事 務 局 か ら

■ボランティア募集

◎ニュース発送作業(年 4 回:3･6･9･12 月)
次回　日時:12/21(土)午後 1 時～4 時頃まで
場所:東京ボランティア･市民活動センター
(飯田橋駅ビル　セントラルプラザ 10 階)
※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加ご希望の方は、前日までにご連絡ください。
【問い】平日午前 10 時～午後 5 時　留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680
◎事務局での平日･土曜日のボランティア作業は不定期に行っています。前もってお問い合わせください。

■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュースレター購読費(2,000 円／年)も募っております。印刷･発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費･寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前･ご住所は楷書でご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費･寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際はお申し出ください。

■下関市立東部中学校の美術の授業で、絵本「生きていたい！チェルノブイリの子どもたちの叫び」(チェルノブイリ子ども基金編／小学館)38 頁に掲載の自画像(「わたしの首の傷あと」ヴェーラ･ワラビヨヴァ　13 歳 ゴメリ市)を観賞しました。甲状腺がんの手術跡のある女の子の自画像です。「国は違っても同じ年齢の子どもの気持ちを読み取ることで、日本に起こった原発事故の悲劇に共感する思いを強くする」と考え、教材にしたとのことです。生徒さん達の感想を、中谷碧都梨先生が送ってくださいましたのでご紹介します。

＊自画像の人の目は、暗くてさびしそうです。首の痛々しい傷は、チェルノブイリ事故の悲惨さが伝わってきます。この人がなぜ自画像を描いたのか、自分だったら、被害にあった人々のことを他の人に伝えたかったからだと思います。今の日本ではチェルノブイリと同じことが起きています。チェルノブイリのことを生かして、一日でも早く元の状態にもどってほしいです。

（二年N君）

＊彼女の悲しそうな表情がとても伝わってきました。さみしいようで何かを私たちに訴えようとしているように感じました。自分の孤独さ、苦しさ、つらさがこの絵にはつまっていると思いました。今をとても恐れているようです。だれかに助けを求めているかのような表情をしていると感じました。心が痛みます。

（三年Tさん）

■寄贈品のお礼

三重被曝児童救援募金様よりご寄付いただいたタオルハンカチとノート、飯吉正志人様よりご寄付いただいたキーホルダーは、この夏ウクライナとベラルーシで保養をした子どもたちへ渡されました。ありがとうございました。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS　年 4 回発行●
〒162-0816 東京都新宿区白銀町 25 メゾンド原 207 号室 Tel／Fax 03-5228-2680
ウェブサイト http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html
E-mail : cherno1986@tokyo.email.ne.jp
事務局ブログ　◇神楽坂事務局だより http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/
※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。